



InterLink

機能ごと電子化された 赤い革張りの手帳

「これを作りたいかったです」。InterLinkの開発を手がけた、日本ビクター企画部の三沢邦子氏が見せてくれたのは、A5サイズの赤い革張りの手帳だった。

デザインしないという デザインの勇氣

「コンピューター」というよりは、誰もが簡単に扱える「道具」へと仕上げたい。これがInterLink開発の根底に流れる精神だ。持ち歩きの苦にならないサイズ、バッグの中でガチャガチャと引っかからないすっきりした形、そして手帳という道具の持つ使いやすさ。冒頭の赤い手帳はその象徴にほかならない。

三沢氏は、また、「手帳1つあればスケジュールからアドレスまでのあらゆる個人情報の管理が完結するように、音や映像を使った楽しいプライベートメールから出張先でのレポート作成まで、個人が外出先で行いたいすべてが1台で完結する世界をInterLinkの中に作りたかった」とも言う。

デザインの「このボディの厚みにバームレストは不要」という結論にたつて最前部に配置されたキーボードと、銀色の濃淡だけで表現されたアプリケーション起動キー群とが、まず目を引く。あくまで平たくシンプルな外形は、一緒に使うとき違和感がないよう

にという配慮からビクターのほかのモバイル機器と同系色で塗装されている。こうしたプレーンなデザインは、1歩間違えれば何もしていないと同義になる。無駄な装飾を廃し、色を多用せずにまとめあげていったのは、デザイナーの勇氣の賜物と言えるだろう。惜しむらくは、ボディのそこそこに見え隠れする詰め甘さだ。たとえば、凡庸なグレーのキーボードはこの製品がほかとは一線を画するモノだという匂いを完全に消し去ってしまっている。発想の原点には素直に共感できるので、シビアに作り込んでいけば、より良い製品に育つと思う。2代目に期待したい。



キーボードはバームレストを省略し最前部に配置された。起動キーは落ち着いた色調でまとめられており、美しい。



平らでシンプルな外形は情報がよく整理された手帳を連想させる。カードスロットがシャッター式でないのは残念だ。

PROFILE ● 酒井俊彦(さかいとしひこ)

サカイデザインアソシエイツ代表。87年東京造形大学卒業。通産省選定グッドデザイン賞、アビターレイテンポ展(伊)、1995デザインの現在展(加)ほか。